

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

### 第115回 「イエッサー、バット」～やっぱり人の悪口は聞きたくない！

第44回衆議院選挙の結果は、自民党の圧倒的勝利に終わったことは、すでに皆さんご存知の通りです。その政策・主義主張は別に譲るといたしまして、色々な意味で、面白い場面が沢山ありました。今回はそんな印象を一つ、述べてみたいと思います。

与野党問わず、露骨に人の批判ばかり言っていた人、やはり、見るに耐えなかったようです。特に今の選挙、テレビ中心にそのままの姿と言動がお茶の間に映し出されます。下品な言葉を引用し、容赦なく攻め立てる姿を見て、「喝采なり」と思った人が、果たしてどのくらいいたのでしょうか？ 政党非難ならまだしも、個人を対象に、その容姿や性格を含め、悪口をまくし立てる画像を見ると、不愉快極まりなく、無教養な<sup>ひんしゆく</sup>輩<sup>へい</sup>ものといわざるを得ません。

「くしゃくしゃのライオン頭」と言った田中真紀子氏、彼女自身の主張は何も聞こえてこないし、一体何をしようとしている政治家なのか、皆目分かりません。彼女の演説の大半は、人の批判であるとすれば、わざわざ国会に行く必要はないかもしれません。この手の事を「ジョーク」と思い込んでいるとすれば、新潟の有権者を馬鹿にしたことでしょう。

「どざえもん」と堀江氏のことを名指しした小沢一郎氏。彼は数いる政治家の中でまれに見る「政策通」、いずれは、日本の将来をしょって立つほどの期待と、実力がある政治家とっていました。いくら民主党と言えども、いくら選挙と言えども、小沢氏らしい理性と見識を捨てないで欲しいと思っています。何回かお会いし、演説もお聞きしました。かつては、「私だったらこう思う...」と、自分の主義を明確に述べ、あまり人の悪口を言わない紳士でした。残念と思っているのは、小生だけではないかもしれません。

小泉首相をヒットラーに喩え、外人記者クラブから「総スカン」を食った亀井静香氏、この人の品のなさや無教養さには、ほとんど閉口します。「浪花節」政治家とマスコミは言いますが、浪花節の根底には「心」と「いたわり」、いわゆる「義理人情」があるはずですが、自分の身内だけを大事にする...では、公人として成り立つはずがありません。お叱り覚悟で、とっても「勘弁な人」と言ってしまうでしょう。

他にも似たような例があったかもしれません。「亀井先生に対して失礼な！」とお怒りの方もいらっしゃると思います。でも、冷静に思い返すと、やっぱりほとんどの日本人だったら、不快感を抱いているし、決して心地よく思わないでしょう。

異論があるのなら、堂々と「イエッサー、バット」、それから<sup>おもむろ</sup>徐に意見を述べる、人を批判する前に、まず、インプットしたいものです。意見を言い合う、議論伯仲の激論とは、相手を理解することが最初のルール、罵倒・雑言を浴びせ、相手を傷付け合うことではないこと、思い出したいものです。